

## まえがき

経済発展と民主主義の関係を統計的に探り非常に大きな影響を与えた『民主主義と発展』（2000年）でプシュヴォルスキ等は、一般に民主主義体制であるかどうかということ、経済発展との関係は、因果関係は薄い、しかし、経済発展レベルが高いほど民主主義の「生存率」は明確に高く、逆に貧困な国では民主主義は脆弱で崩壊する可能性が高いことをみいだした。また民族的に複雑な構成をもつほど民主主義であれ権威主義であれ体制を維持することが難しいことも確認した。このような観点からすると途上国で、民族的にもきわめて複雑なインドが長年民主主義を維持してきたことは非常にまれな例であるという。いわばインドは一般的な常識からすれば例外的な民主主義体制なのである。このようなインド例外論はプシュヴォルスキ等の研究だけに限らない。

インドを長年観察している地域研究者にとって、このようなインド例外論は一笑に付すべきものであろうか。独立以来インドに現実に民主主義体制が存在してきたという事実をもってそのような論を意味なしとして否定できるであろうか。インド政治の表面的な部分だけをなぞるのであれば拒否もできるであろう。しかしインド政治の実態をより深く探れば単純に否定できないというのが編者の思いである。その証拠はインドの民主主義体制が政治社会の実態と起こしてきたさまざまな摩擦、歪みの存在である。たとえば1975年から1977年の約2年間、現実との歪みに絶えかねた民主主義体制は「停止」してしまった。また、頻発する暴力や、低カーストや社会的弱者層に対する構造的抑圧もある。つまりインドの民主主義は逆風にさらされながらさまざまな面で軋みをあげて、いわば「無理」をして存続してきた体制なのである。このような見方にはおそらく反対する研究者も当然いるであろうが、最低限

インド民主主義体制の「安定性」の陰にさまざまな問題が積み残されていることは否定できないであろう。本書はそのような軋みをあげてもなお適応進化してきたインド民主主義の現状を分析した論文集である。したがって本書ではさまざまな歪みや軋み、問題点が分析されることになる。

各論を精査し本書をまとめた後で編者が思うところは、問題を抱えつつも民主主義体制はより深化していくであろうという予感である。それはさまざまな局面で問題への対処が行われ全体としてみるとより歪みの少ない状況に向かっているのではないかと思われるからである。それは個々の局面での場当たりの対応であるかもしれないがその累積的效果はおそらく無視できない。このような編者の予感が間違っているかどうかは本書を読んで判断していただくほかないであろう。

最後に本書は2007年から2008年度にかけて行われた「インド民主主義体制のゆくえ」研究会の成果である。研究会に参加していただいた委員、研究会幹事、論文を改善するために査読の労をとっていただいた匿名レフェリー、本書の編集・出版に携わっていただいた関係諸氏、そして、とりわけ、現地調査において厳しい「軋み」や「歪み」の現実を生き生きと語ってくれたインドの人々に謝意を表したい。

2009年7月

編 者